

162

891

島地默雷師題辭
佐々木量俊師編輯

第貳編

新撰
改良
活用
說教

京都

顯道書院藏版

特18
720

新編
法苑珠林

法苑珠林

鳴地默雷師題辭
佐々木量俊師編輯



第貳編

京都

顯道書院藏版

夜福

金剛

佛
三
世
尊

道樂

明治壬辰秋日

雨田老訥



新撰活用説教第貳編目次

○たのむか無ればよひに	一丁
○南無はたのむ機の方あり	六丁
○雑行は捨てよ雑修は止めよ	九丁
○衆生は忘る佛は忘れそ	十三丁
○虚妄の中に眞實が出来た	十七丁
○憶念の心	二十丁
○まゝにあらぬが娑婆	二十三丁
○白道のせまきは何故ぞ	二十六丁
○他の不幸を見て戒慎せよ	三十丁
○極樂は鏡の如し	三十三丁
○二心ではいけん	三十五丁

○理論と實際	三十九丁
○六字九の傳來	四十三丁
○香と鼻と和	四十五丁
○已れを忘る	四十八丁
○聞投飛礫	五十丁
○一念大利	五十三丁
○此休は誰のものか	五十七丁
○煩惱の林に遊ぶ	六十丁
○力の最上	六十四丁
○世にたのむべきものなし	六十七丁
○御勤めは念佛せよ	七十丁
○相續の本行は何か	七十三丁

○活き如來と思はれまどか	七十七丁
○如來の十恩	八十一丁
○一番易ひ仕事は二つ	八十五丁
○悪水の源を防げ	八十八丁
○ましての翁	九十丁
○佛誠と親の異見と同じ事歟	九十一丁
○胸に棘あり	九十二丁
○嫁追ふ鬼は何處に居る	全丁
以上三十一題	

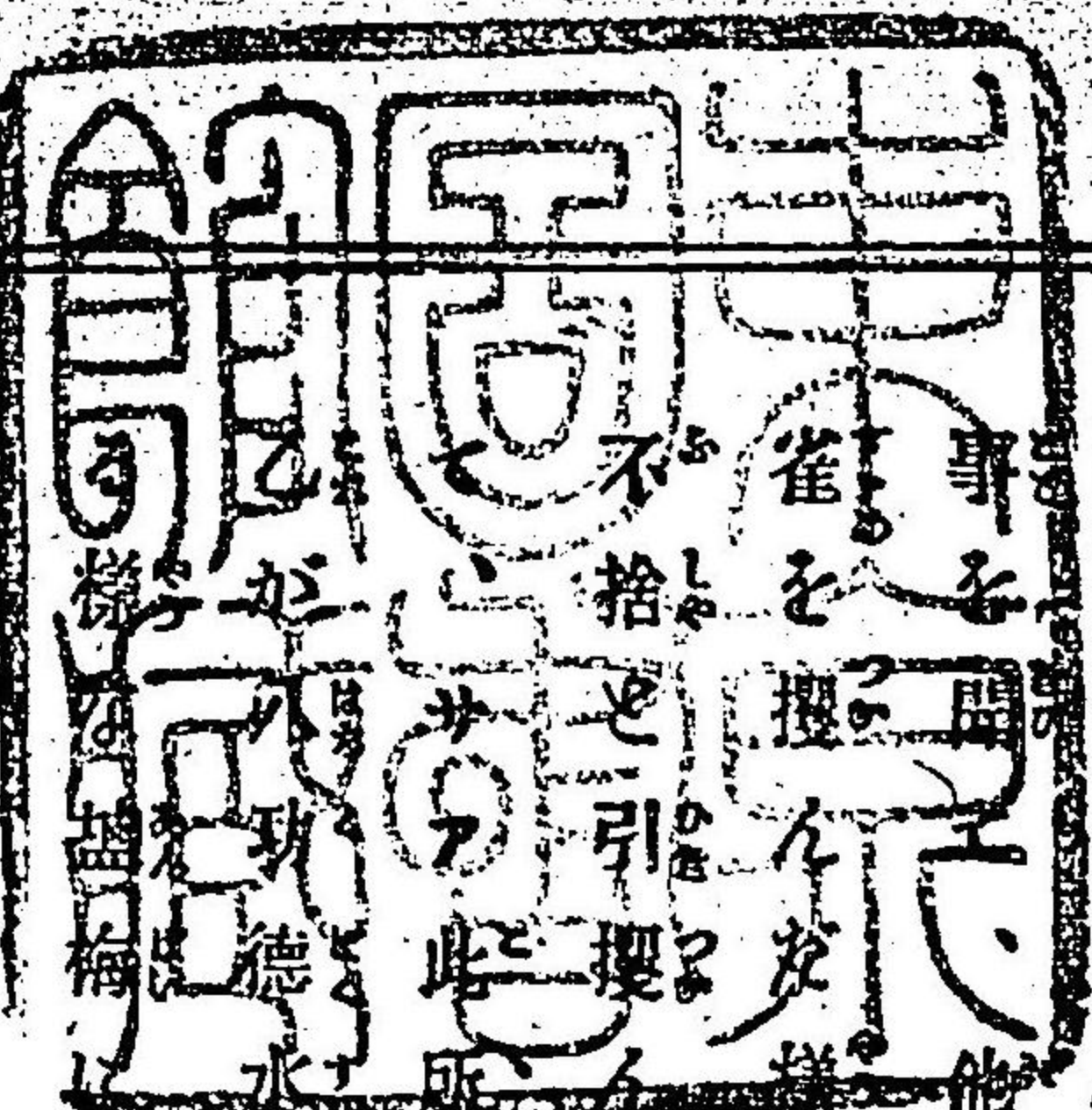
新撰
改良
活用
説教
目次
終

新撰活用説教第貳編

佐々木量俊集

○たのむが無ればとひに

他力の御助けくと云



事^{こと}を^を聞^きて、他^た力^{りき}の御^{おん}助^{すけ}けなら、たのむと云^い事^{こと}なしに、鷹^{たか}が
 雀^{すずめ}を^を攫^{とら}んば、此^{この}私^{わたくし}しとば、阿^あ彌^み陀^だ如^{にょ}來^{らい}の御^{おん}力^{りき}らで、攝^{とら}取^と
 不^ふ捨^しと引^ひ摺^ずん、
 で、西^{さい}方^{ほう}淨^{じやう}土^どの蓮^{れん}臺^{たい}上^{じやう}に、とつさりと坐^まらせ
 が其^{その}方^{かた}の樂^{たの}しむ場^ば所^{じよ}、甲^あが七^{しち}寶^{ぼう}の樹^{じゆ}林^{りん}なり、
 の池^{いけ}なり、自^ま由^ゆに遊^{あそ}び樂^{たの}しめよと、云^いて下^{くだ}さ
 助^{すけ}けて下^{くだ}されたら、夫^{それ}こそ他^た力^{りき}の御^{おん}助^{すけ}けな
 るに、たのめくと云^いはれては、何^{なに}やら骨^{ほね}が折^おれてなりま
 せんよ……是^{これ}誠^{まこと}に大^{おほ}きなる心^{こころ}得^え違^{ちが}ひなり、今^{いま}一^{ひと}の喩^{たと}へを
 以^もて示^しさん、坐^ま敷^{しき}を奇^き麗^{れい}に掃^そ除^{じよ}して、床^{とこ}の掛^か物^{ぶつ}床^{とこ}飾^{しき}り、

水の垂る様に生花やら、天鵝絨氈をは敷き詰めて、巻繪の煙草盆に、金銀ふき分けの烟管杯を添へ、薩摩國府の上等やら、一つが五錢も八錢も價のある様な生菓子をば、梨地の菓子器に山の如くに盛り立て、一斤が五圓もそる様な玉露製の茶を用意し、盛上る様を緞子の蒲團、二枚も三枚も引き重ね、鼻のもげる様な結構な香をば、銀の香爐に薫じ立て、……さて庭前に戯れ居る所の、赤狗を一疋引捕へて、其座敷へかへ込み、コリヤ赤狗よ、其方ハナア毎日、空腹をかへて鼻をそり、何か得物はあらずかど、密かに糠桶の蓋をはねて、ペチャ〜と、舐りかけるを見とめられ、火吹竹を御土産に貰ふたり、食堂に忍び入り飯器の蓋をとりて、一口二口喰ふか喰はぬで、忽ち「オ

ナへに見付られては、帯を頂戴したり、實に早や氣の毒で可愛想で不可堪的から、今日は汝を腹一杯「タンノウ」させて遣らふとて今朝からかりて此通り、立派に坐敷構をなして、汝を爰へ案内を致した事である、サア今日は遠慮は無しに、恐れ氣無しにた、かれる氣遣は無ひから、此より香ひをかぎつ、此澤山な生菓子を充分腹一杯喰ふて思ふ存分樂しめよと、彼緞子の蒲團の上に、「ドツサリ」坐らせたら彼赤狗は何思ひけん、あたりを「ツク〜」見回してウ〜とどどががりつ、忽ち障子を蹴破りて、「クワン〜」どかぶりふりつ、逃げ出したり、そこで亭主は「コレハシタリ」切角喰はそふと思ひ立たに、「クワン〜」とは胴欲ぢや、「ドン〜」最一度連れて來と、後を追へて走りければ、彼赤狗は、早

や裏な畑で糞喰ひ居りたど……鹿末な喩へ乍ら能く考へて御覽んなさひ、道理は外る、ものではない、狗と人間とは境界が違ひますから、人間の楽しさは狗では分りません、そんな結構な坐敷で、そんな結構な香ひをかひで、そんな結構な菓子喰ひ、そんな結構な茶を呑んで遊ぶのなら、私等は毎日でも御案内が貰ひたい、併し同じ香ひとかぐ鼻ではあれども、狗の鼻には眞盤の香ひよりは、糞の嗅ひが好ひのであります。阿彌陀如來は自在神力を備へさせられた佛け様ゆへ、鷹が雀を攫んだ様に、此我々を淨土まで、攫んで行かしてやる事は、出來ん事ではあります。まひが、併し此体と此儘淨土へ連れ行かれては、人間と佛とは境界が違ひますから、人間の体では淨土の楽しさは少し

も分りません、こんな体を淨土へ連れ行かれたら、阿彌陀如來はさす御困却で御座ひませふ、何せおれば此有漏の穢身は、大小二便と垂れねばならぬ体あり、「モ一シ阿彌陀様私しや糞が仕度御座ひませ、又小便が出そふに御座ひませ……待て、此極樂には雪隠や小用所は無ひのであるから、「ド」娑婆へ連れて出てさしてやらふ、中々造作でありません……「サアよく御聞きなさい、体を連れて行て事が済むなら、たのめとは玉は老、信せよとは玉は老、此度は魂を場所替へさせる御仕組ゆへ、信じて呉れねば連れられぬ、たのんで呉れねば參らされぬ予とある御謂れゆへ、たのめ」と呼び玉ふ佛勅なり、早く彌陀たのむ身と成りて、其易ひ味ひを掌め玉へ、

○南無はたれむの機の方なり

御文に南無はた

のむ機の方なり、阿彌陀佛へたそけ玉ふ方の法なりとの玉
へり、然るにたのむと云事を六ヶ敷思ひ、大義に思ひいつ
そ此たのむと云事が、無ればよひにと思ふ様な、心得違ひ
をそる人達がありまそが、彌陀の御助けを聞ひて、何ども
なければたのむに骨も折れまそが、御助けと云事を聞きま
して、ありがたければたのむより外はありません、依て南
無はたのむ機の方ぢやと、御示し成されたものなり、茲に
一人の横着な老父がありまして、息子に命じて云には今日
は鯛を一尾買て来ひと 息子 かしこまりましたと、直に一尾の
鯛を求め来り父さん買ふて来ました、是を云何致しませふ
老父 夫を三枚にをろせ 息子 かしこまりました、息子は此うろこ

をふひて三枚にをろした、三枚にをろしました、之を云何
致しませふ 老父 夫をさし身にせよ 息子 かしこまりました、
は直にさし身とこまらへ、出来ままた云何致しませふ 老父 山
葵をそれ 息子 かしこまりました、直に山葵をすり、そりまし
た云何致しませふ 老父 此所へ持ちて来ひ 息子 かしこまりました
直持て来た云何致しませふ 老父 喰はして呉れ 息子 かしこま
した、箸で狹んで老父の口中へ入れた……… 息子 云何で御座
ひまそ 老父の 呑み込んで呉れ 息子 今度はかしこまりましたと云
はれません……… 今此喻を以て他力の法をあらはさば、衆生
私しは願が御座りません、彌陀 よし 五劫か、りて願をこ
しらへた 衆生の 私しは行が御座りません 彌陀 よし 永劫か、り
て行を拵へた 衆生の 私しは其願や其行が貫ひ度ひ 彌陀 よし 南

無は願ぢやぞ阿彌陀佛は行ぢやぞ、此願行はそあたへのや
りものに拵へたで、そなたのものであるぞよ衆生早ふ其願行
の佛け因が欲しひ彌陀よし〜我を一心にたのむ計りでやる
ぞよ衆生どふぞ次手にたのんで下され彌陀よし〜と云はれま
そまひ……鯛をさしみにして口中へ入れるまでは、かし
こまりました〜と何返でも承知が出来れど、吞込む一段
に成りては、喰ふ人が吞込まねばなるまひ、我等が佛け因
を成就して、聞其名號と耳口より開かせるまでは、阿彌陀
如來の御仕事なれば、何でも角でもよし〜と受込んで下
さるけれど、最早其御謂れが開へた上は、次手にたのん
で下されと云はれては、最早よし〜とは彌陀は云はしや
る事はなりません、爰を南無はたのむ機の方なりとはの玉

へり、骨の折れるたのみ心なら、小言も云て居らるれど、
何の様もなく何の造作もなく、口に入れて貰ふたさし身を
吞込むよりもまだ〜易ひ、信心歡喜の御謂れゆへ、たの
まれるのたのまれんの、頂かれるの頂かれんの、小言を止
めて、案じな南無助けてやる阿彌陀佛の其儘を、頂ひて信
心くつろく歡喜計りてありませ、皆さんよ深く此道理を味
ひ玉へ、
○雜行は捨てよ雜修は止めよ 捨つべき雜行を
捨てよせせ、止むべき雜修と止めよせせ、常に自力根性に
はたされなば、祖師聖人の御教に背くのみならず、阿彌陀
如來の佛智に違ひ、未來往生成佛の仕合せを頂く事はなり
ません、一心一向と云は阿彌陀佛に於て、二佛を并べざる

こゝろありと仰せられて、彌陀御一佛に不足の念慮を離れて、たんのふしたが一心一向の御領解なり、一人の君に不足の念ひと離れたが忠臣なり、一人の亭主にたんのふしたが真女なり、彌陀一佛をたのみたてまつり、更に余の方へ心をふらぬ、身になりたるが一心一向あり、雑行や雑修て彌陀の淨土へ参らふとぞるは、阿彌陀如來も御嫌ひ、釋迦如來も御嫌ひ、十方諸佛も御嫌ひ、七高僧も皆御嫌ひ、祖師聖人は別して御嫌ひ、依て彌陀釋迦諸佛七高僧方の思召を受けさせられて、愚禿を、ひるところさらに私しなしと玉へり、御子の善樹様が雑行雑修と成さる、に付て、到頃御勘當あらせられ、御臨末の其時段、の御説もありたれども、末の代の總門徒にはかへられぬとて、終に御許しはな

かりしと……八代目の善知識中興上人、東國御經回の砌鎌倉近傍にて樹へ茂りたる森のあるを認めさせられ、あれは云何なる所あるかと、御尋ね成されたれば、あれは善樹法師の墓所ありと答へたら、中興上人はあれが善樹が墓所であるか、祖師聖人の御嫌ひの、雑行雑修を止めせして、終に御勘當まで受けたと思へば、其森を見るも目がけがれりと、御笠を傾けて其所を御通り成されたと承る、夫ほどに思召そ中興様ゆへ、御文の中には若此教を用ひせして、雑行雑修を止めぬならば、永き世開山聖人の御門徒たるべからざるものなりと……、永く門徒中の一列たるべからざるものなりと……、親の勘當は詔言をして許して貰はれる事もあり、主人の暇は又改心して、再び使ふて貰は

れる事もあるが、御目ながひ祖師善知識に見離されたれば
 無量億劫浮ふ時節はあゝるまいもしれぬ、網裏魚なし酒銭な
 し、酒家門外口涎を流そ、幾回か簑衣を解ひて當てんと欲
 そ、又畏くは明朝是雨天ならん、どの詩がありまそが、雨
 降りには簑笠で網をうちに行た處が、とんと魚が取れあんで
 颯張精が無ひ、幸ひ歸り路に酒家がある、一盃飲みたひも
 のと思へども、懐中には銭が無ひ、去りどて酒家の門が通
 りぬけられもせせ、酒家の門を往たり復りたり、口は涎を
 流そほど飲み度くなりた、最早雨も降り止んだで、いつそ
 此銭を賣にをひて、酒を飲ふかと思へども、又明日雨天な
 らば、此銭を離しては成らぬに依て、左右も成らそと困り
 た意を、詩に造りたるものぢや、表面は雜行は止めた、雜修

は捨てた様にありても、何か變に逢ふたとき、俄に御祈禱
 が仕度なり、願立が仕度なれども、必そ其心を動かしては
 成りません、酒家の門を通る時、銭を賣ても飲み度ひは
 どにありまして、若銭と賣りたら、雨降に難義をせねば
 あらぬ、いかに現世に執着するどても、雜行雜修をそるな
 らば、祖師聖人の御意に背き、未來極樂參りを取り損える
 で……………つ、しむべしく

○衆生は忘る佛は忘れど 一念本願を信せる身

となり、彌陀をたのむ心には成りあても、衆生の方は常に
 忘る、事あり、佛は片時も忘れ玉ふ事あし、昔し叡山正願
 院の僧正法用ありて、南都に赴むかれたるに、奈良の町に
 年はやふく、五つ六つ斗りの健康なる男の兒が「オカ」

く、と母を呼で泣叫んで居る、是は巡禮回國の母子二人の
 旅の空、母にはぐれて悲むものならん、あら不便可哀やな
 ど、僧正は衣の袖をぬらし玉ひ、立ち寄りて何國のものぞ
 所はいかに、親は何と云ものぞと、尋ねられるも、何國
 とも辨へ知らぬ童の、只母に逢ひ度ひくと泣より外はあ
 ひ、僧正はとも哀れに思召、自ら其子の手をとらせられ、
 殿山に連れ歸り、里房に糊口をさ………而して迷ひ子の委
 細を書きて、親があるなら尋ね來ひと、方々に札を立てを
 かれました………さて慈悲深ひ僧正の事なれば、近處の
 子供等を集めて、様ぐの兒戲又は菓子杯を興へて勞り
 玉ふに、流石は稚きものとして、嬉戲に性根をとられ、菓子
 饅頭にだまされて、母の事を忘れて遊びけるが、黄昏時や

夜の寐覺や、物さびしき折くは、母の事を思ひ出して、
 さめくと泣き出そゆへ、僧正はいと不便に思はれしが
 三十日計り立つと、母は伊豆の國の者なりとて、やふく
 尋ね來り、紹介を以て僧正へケ様くと申上ければ、さら
 ば母子を對面させよと………其子を連れ出して逢したれ
 ば母子の喜び一方ならせ、實に優曇華の花待ち得たる心地
 是は夢かや現かやと、嬉し涙に咽せ入て、暫時は言も無り
 しが、や、ありて僧正は母に向ひ玉ひ、汝が此兒に別れて
 より、さぞや心を痛めつらん、去り乍ら日數もある事なれ
 ば、其間に、此兒の事を、忘れたる事もありしやと、尋ねた
 まひたれば、母はやふく涙を拭ひ、僧正様には子を持ち
 玉はねば、親の心は知れまをまひが、不圖此子にはぐれて

より、晝間は終日泣きくらし、夜分は通宵目もあはせ、旅籠屋に宿りし時は、我身は此通り屋の内に此宵一夜を明すが、彼子は云何なる愛目に逢はんかと思へば、いと身も苦しく、又行かれて松の樹蔭に野宿せし時は、我さへも斯る難義、況て稚き彼子の行衛、狗や狼に噉まれやせんかと思ひ回らせば、坐るに夜の目もあひませせ、何に付け角に付け、今日回り値ひまそまで、暫時も忘れはしませなんだと申したれば、僧正さこしめし特に感じ玉ひ……、さては往生疑ひおしと申されたる……、此僧正の感じられたは何ぞと云に、我等衆生は迷ひ子の如く阿彌陀如來の大悲の母、信心の御血脉と分けたれば、親子に紛れは無れども、娑婆の里房に在る間は、煩惱の友達に紛れ、恩愛の

菓子にだまされて、大悲の母を打忘れ、南無阿彌陀佛と呼ぶ聲も出せ……、如來の方には片時も忘れ玉はせ、晝となく夜となく、大悲の御心には憶念成されて、須臾も我等を忘れ玉はぬゆへ、其御念方に喚起されて、折々は南無阿彌陀佛くと、如來を慕ひたてまつる心にはなりま……、此法味を僧正は思ひ合はされて、さては往生疑ひなしと申されたのでありませ……、かの迷ひ子は三十日を経て、不圖母子の對面をしました、此念佛行者はこ、三年か五年の後に彼尊に回り逢ひ無量永劫の久し振りに、生佛の對面をぞる事でありませ、

○虚妄の中に眞實が出来た

煩惱具足火宅無常の此世界は、萬つの事そらごとたはこど眞實は一つもなひ

凡そ三界の分野は、虚偽の相、輪轉の相と名つけて依正二
 報何れも角も、皆うそいつはりで、眞實な事は一寸もあひ、
 ちぎりきなかたみに袖をしぼりつ、末の松山波こさじとは
 互にまことを云ひかはし、いつくまでもと思ふても、百
 年同じく謝そ西山の日、千秋万古北邙の塵り、人も死それ
 ば我身も死し、灰ども成れば土とも成り、思ふた事も云た
 事も、桐柄は一つもなひ、皆虚妄になりて仕舞、假ひ命は
 長ふても、凡夫の習ひと云ものは、初は眞實に思ひ込んで
 る、未まで眞實は逃げにくひ、幾度か思ひ定めてかはるら
 んたのひまじきは我こ、ろなり、飛鳥川の淵秋の夜の空、
 さりとてはあてにはならぬ、ク様な心にて浄土と願ふて見
 ても、眞實の心は出来ません、浄土眞宗に歸それども、眞

實の心はありがたし、虚假不實の我身に、清淨の心も更に
 なし、今日の我々は祖師聖人の御教化を聴聞して、後生は
 大事と知り手には珠鍬を持ち、口には名號を稱へ、参り下
 向の足手を運び、其分野を側から見つた時は、雨晴の信者の
 様に見ゆれども、夫も多くは名聞人并で……、紙幣贖造
 は嚴敷法律があるから、いかに欲の深ひ凡夫でも、滅多には
 致しません、御法義の贖造には、表面の法律が無ひから、
 恐れ氣もなく、滅多やたらに贖造が多ひ、併し此名聞やら
 利養やらで、贖造法義を使ひ居りたる私しに、衆生貪瞋煩
 惱中能生清淨願往生心と、虚妄の中に眞實が出来、青藕に
 正金銀貨を包むが如く、器物に至りて龜末千万なれども、
 彌陀御回向の金剛心ゆへ、往生一つは間違ひはなひ、此間違

ひの無き金剛心を相續して、眞實信心の稱名は、彌陀回向の法なれば、不回向とあづけてぞ、自力の稱念さらはる、是までの履造法義を打破り、眞實信心の稱名を、ねてもさめてもへだてなく、自力稱念打止めて、佛恩報酬の其爲に、南無阿彌陀佛をとなふへし

○憶念の心

御文に憶念の心つねにして忘れざるを、本願たのむ決定心を得たる、信心の行人と御示しなされた、此憶念の心と云は、彌陀をたのみたる心の相續して彌陀御一佛がなづかしく思はる、心にして、子の母を念ふ如くにて、衆生佛を憶すると、御和讃には示し玉へり、一念阿彌陀佛を大丈夫千人力と思ひ込んだる心が、胸の中に忘れられぬ事である、間だは忘れて居る様でも、何ぞ事に

出合ふ度に直に思ひ出そ、之が憶念の心なり、可愛吾子を東京へ奉公に遣したるが、間だは忘れて居れど、正月ぢや盆ぢや節句ぢや祭禮ぢや暑ぢや寒ぢやと、事に當る度に必き吾子の事が思ひ出さる、是がねてもさめても憶念の心つねにして、忘れんと云意味合なり、沸羹に懲りて冷菜と吹く、傷弓の鳥は曲木に驚くと申して、熱ひ物で喉を焼た覺へのあるものは、寒ひ物でも吹ひて食ふ、弓に射られた例しのある鳥は、曲りた木を見ると畏れて翔げる、黒狗に噛れて渥のたれかそにをぢると云も此道理にして、眞實心に染み付肝に銘じた事は、滅多に忘れられぬものである、始終思ひ通しでは無れども似た事に出逢ふたら、直に其事を思ひ出そ、今念佛行者も之と同一事にして、茲に祖

師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓をき、歡喜胸に
 滿ち渴仰肝に銘せど、一度他力本願の尊とさが身にしられ
 心に染み込みまそと、思ひ詰めでは無れども、病ひに逢へ
 ば思ひ出し、無常を聞けば思ひ出し、何に付け角に付け、
 御恩の稱名の思ひ出さる、は憶念の心常にして、佛恩報す
 る思ひのある相たふり、憶念の憶の字は憶持不忘の義と申
 して、心に持ちて忘れぬと云事、酒徳利や茶壺の類にも、
 持ちの好ひのと不ひのどがある如く、吾人凡夫の胸の中は
 有漏心と申して器物に瑕釁の入り如く、一つの胸に八万四
 千散乱龜動とひいさが入りてあるゆへ、開た事も見た事も
 善ひ事は皆漏りて仕舞ひまそ、又持ちの好ひ古備前杯と云
 陶器に酒を納れ置けば、味あひ酒も美くなり、茶をつめを

けば微りた茶もかはく如く、今如來の本願は上手の焼ひた
 器物の如く、彼等の御慈悲に任せたてまつれば、自力疑心
 の悪臭が去り、雜行雜修の濕りが乾き、歡喜愛樂の美味が
 出て、憶念稱名勇みある御相續の出来るは、持ちの好ひ南
 無阿彌陀佛の御器を、心中に入れて貰ふた用きであります
 ○ま、にならぬが娑婆
 我々に至るまで、皆我心の儘に成らぬが此娑婆世界と云
 ものなり、朕が心になはぬものは、鴨川の水と双六の骰
 と山法師ありと、後白川法皇は常に御歎息成されたと承る
 實に天子の御身の上は、御尊ひ御果報なれば、何事も御心
 の儘なるべきに、鴨川の水を上へ流し、双六の骰を望みの
 通りに振出し玉ふ事がならせ、山法師が毎度困た事と申し

上げ、敵慮を惱まし奉りた事がある、此三つは朕が手に合
 はぬと、御歎きあらせられたとある、天子様さへ御意に叶
 はぬ事が澤山ある、況や四千萬の人民に於てをや、貧しき
 者は富める者を羨み、賤しき者は貴き者をけなりがる、け
 なりがらる、富貴の人達は、何も不足は無ひかと思へば、
 有田愛田有宅愛宅、田があれば田に付ての不足、宅があれば
 ば宅に付ての不足、金銭があればあるに付ての世話、官
 位が高ければ、高ひに付ての心配、高ひ木は風が強く當り
 出る株は打たる、香ひゆへ命を奪はる、麝香もあり、牙
 ゆへ身を亡ぼそ象もあり、上り船の喜ぶ順風は、下り船の
 嫌ふ逆風となり、下り船の喜ぶ順風は、上り船の嫌ふ逆風
 とある、風呂屋に至る時は、ぬるひ好は鶯の如く梅よく

と呼び、熱ひ好きは雀の如く竹よくと喃々る、舳艫相美、
 ひと申して、風波あらし渡り舟舳に乗りたる人は、舳に乗
 れば好りたにと思ひ、舳に乗りたる人は、舳に乗れば可か
 りたにと思ひ、互に不足に思へども、同じく乗り合ふた舳
 なれば、舳も舳も何れ難義は同じ事である、一天万乗の御
 身でさへ、叶はぬ事が澤山あるからは、四千万の同胞兄弟
 の我々、果報拙き身の上は、心の儘に契ふ事がある筈は無
 ひ、佛け様でさへ佛の三不能と云事がありまして、一には
 定業を免れ玉ふ事かなはせ、提婆の投げた石が、御足にあ
 たりて御經我を成されたる杯は則ち定業なり、二には一切
 の衆生を悉く成佛させると云事が出来ぬ、三には縁無き衆
 生は度し難し、何はぞ可哀と思ふて下されても、網よりも

る、魚の如く、佛の御力らでも助くる事がならんとありま
 そ、左すれば一天万乗の帝でも、三界獨尊の佛でも、心の
 儘に成りません、況や我々が如きものに於ては、一生心の
 儘にはかなはざるなり、茲に心の儘に自由に自在に、諸願
 一満足思ふ通りに成られる術がありませ、夫は何所にありま
 そか、佛教と云否真宗と云門の中へ這入て御求めなさひま
 せ、

○白道のせまきは何故ぞ

善尊大師の二河白道の

御言に、一の白道あり闕さ四五寸許りなるべしとありませ
 が、此信心の白道は何故にせまひかと云に、貪欲瞋意の二
 つの河が、余り廣ひから夫が爲に信心の白道はせばめられ
 てやそくなるのである、是は凡夫の相續ゆへなり、若菩薩

聖者方の相續なれば、貪欲瞋恚の水火の二河が狭ひから、
 信心の白道は自ら廣く成りませ、今は本爲凡夫の本願の御
 約束を、喻にかけての御教化ゆへ、信心の白道と狭くなし
 て、ほそくとしたる相續ぞよと、御知せにありたるもの
 なり去り乍ら秋風に驟驟雲の斷間よりもれ出る月の影のさ
 やけさどある如く、月は曇りなく天上にか、やけども、村
 雲に隔てられて、月の光りは明かに見へません、然れども
 秋風が颯と吹來れば、其邪魔をして居る雲か斷れませ其斷
 れ間にチヨヒくと、あらはれる月の光りは、ひとしは明
 かにさへ渡りて、面白ひと云た歌の意であらふ、今も其が
 如く他力御回向の信心の月は、歡喜踊躍の光りと具へて、
 心の中天にか、やき玉へども、わけくれとこる貪欲瞋恚の

煩惱の村雲が邪魔とぞるゆへ、天に踊り地に躍るほどの、
 歡喜の光りはささねども、御やるせの無ひ大悲の秋風が、
 心の空に吹き渡らせられたれば、煩惱妄念の斷へ間より、
 喜びの光りがもれ出で、さても尊とやと喜ばれる、此は
 そくとした喜びは、ひとしはありがたひ……、都て物
 は余り澤山にあるよりは、少ひ方が却りて賞玩するものな
 り、花を未開に愛そと云事がありまして、甲の花も乙の花
 も、至で咲いた時よりも、初めて三輪か五輪開きかけて、
 葉とくの間だから、チラくど笑ひかけた位ひが、ひと
 しは味ひがあるものなり、月も雲あくして一天に晴れ渡り
 たるながめよりも、繁りし庭の木の間より、チラくども
 れてさしこむは、とことなふやさしくして、面白ひもので

ある……、赤染の衛門が或人より、大きななる櫻の枝を折
 りて送りたる時、一首の哥と書ひて送りたる事あり、「我
 爲に折れる心は嬉しく花おしませと見ゆる枝かな」と、大
 きなる見事な櫻の枝を贈りて下された、御志しはかたじけ
 なきひけれども、是ほどの大きな枝を、惜氣も無ふ折ると云
 は、花を愛せぬ心と見へて、残り多ひと残念がりた哥の意
 である、是は全く花が多ふそきて、却りて面白くあかりた
 ……、今我人が此信心相續も、此道理にして佛祖廣大の
 御恩を思へば、手の舞ひ足の踏む所も知らせ、暫時も忘れ
 てはならぬ筈なれども、散乱鹿動とちりみだる、凡夫の胸
 の中、中々喜び詰めには成りませぬ、貪欲の水や瞋恚の火
 が、死ぬるまで斷へ間なく、常住不斷胸の中をば、或は焦

し或は濕しまるゝ、其間たゞにホソク御恩を思ひ浮べ
 て喜ぶは、即ち信心の白道あり、此娑婆界を渡る中に、煩
 惱の河幅を狭ふして信心歡喜の道幅を闊げふと云事は兎て
 も叶はぬ事であれど、其妄念煩惱に思ひ亂る、中からむ、
 はしひおしひの木の間をまれて、ありがたや尊とやと、稱
 名相續の浮び出るは、一入御慈悲が身にしみて、御恩のは
 どが喜ばる、ゆへ、白道の狭きを愁る事勿れ、

○他の不幸を見て戒慎せよ
 獅子と狐の話しがあ
 りまどが、獅子が年が寄りまして、餌食と得る事が出来ま
 せんので、一つの思案を編出しまして、「私しは此節大病に
 取り結び、毎日洞穴の中に寐て居りますゆへ、知己の御
 方々は生前の御別れと思召して一度御見舞下され度し……」

と○○新聞に廣告を致しました、所が種々の獸類が此廣告
 を見て、モ一安神ぢや該獅子が大病に取り結んで死んで呉
 たら、我々共は恐ろしひものはあひ……併し大病とあれ
 ば、一度は見舞はねばなるまひと、追々洞穴へ出掛ました
 獅子はサア計畧が中りたど、心の中に窺かに喜び、其見舞
 に來た奴の隙を見そまし、攫み奪りて餌食に致しました、
 毎日く其通りにして居りますと、狐は是を不審に思ひ、
 何んでも怪しひ工合ぢやと考へまして、今一度其實否を正
 し度ひものと、或日獅子の洞穴へ見舞に参り、御そばへ寄
 は失敬であると云風に視せかけて、洞穴の口からうやく
 しく両手をついて、獅子王には御病氣の御容子は如何に
 や、早速御見舞に出る筈の所、今日まで御無沙汰つかまつ

りましたと挨拶しますと、獅子の云にはオ、誰かと思ふた
 ら狐君か、サアズツと此方へ御入りなさへ、私しは此節病
 氣で最早足も腰も立ちませんから、御無禮ながら御出迎ひ
 は致しません、マア、此所まで這入て下され、又々若ひ時
 分からの昔しはなしても致しませんと云ひましたら、彼の
 狐は「イヤモ、今日は御免を蒙りました、此所から御挨拶と
 申し急ぎ歸りませふ……其譯は別義でも御坐ひませんが、
 此間中私しより前へ御見舞ふ参りた者共の、足跡を調べて
 見まされば、随分澤山にありませれど、皆あちたの方へ向
 ひて這入りた足跡計りにして、此洞穴から出た足跡が一つ
 も御座ひません、何んでも此は仔細のある事かと思ひませ
 ゆへ、今日は此儘御暇とつかまつりませと云た……前車

のくつがへるは後車の戒め、他の不幸を見て自分を慎まね
 ばなりません、今日世界に不幸な人が澤山ありませが、其
 不幸は何から出来たと云事を能く氣を付けまして、博奕の
 結果か、散財の結果か、相墮の結果か、不攝生の結果か、
 不勉強の結果か、何んの結果か角の結果か、何れ善ひ事の
 結果ではありませんから、其所を能く調べて我身を慎み、
 失策せぬ様に深く注意しおければなりません、

○極樂は鏡の如し

蓋を取りて鏡に向へば、直に

我身の影がうつる、大經に猶明かなる鏡を以て、其面像を
 みるが如しと御誓ひ成されて、極樂淨土は磨きたてた鏡の
 如くなれば、十方世界の分野は悉く極樂に影をうつしますと、
 之を大經には三千大千世界を映現して、一切の佛事皆中に

於て現ぞと御説き成されてあれば、葬式し居る分野も、法
 事つとめる分野も、説教し居る分野も、聽聞し居る有様も、
 疑ひ居る有様も、信じ居る有様も、何れも角も一切の佛事が
 皆、極樂淨土へうつりませ、左すれば雜行雜修自力疑心を
 捨てましたは、丁度鏡の蓋を取りた様なもの、御たそけ候
 へどたのみたてまつれば、迷ひの此身は此所に有り乍ら、
 早や証りの姿は極樂へうつりて、心は淨土に参りませ、之
 と本願成就の御文には、即得往生住不退轉とは説かれたり、
 御和讃には超世の悲願さ、しより、我等は生死の凡夫かは、
 有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に住みあそぶとありま
 そ、昔にかはらぬ罪造りの凡夫なれども、一念皈命の時よ
 り、最早極樂の人數に加へられたれば、日々暮る世渡りに

は、昨日のありさまも今日のありさまも、一々淨土にうつ
 ると思へは、益々諸々の善をなし、先我身を修めて耻かし
 くなひ体となり、神様にも佛様にも眞向になりて、面の見
 て貰はれる様にせねばならぬ、心の垢のたまらぬ様にして
 精々宗教の水を以て心を洗はねばならぬ、心の垢がたまり
 まそと、咎もなき戸障子の開閉がはげしくなり、やさしさ
 目付きに角がたち、念佛稱ふる其口で、家内中をいぢめ、
 氣兼さを様な事になるは、皆心の垢が手や眼や口へ吹き出
 るのである、かくの如く總ての善ひ事も、總ての悪き事も、
 鏡の如き極樂へうつると聞ひては、専ら身口意の三業を慎
 まねばならぬ事である

○二心ては「イケン」

佛號むねと修それとも、現

世といのる行者をば、これも雑修となづけけてぞ、千中無一
とさらはる、と、御和讃に御誠めがありまして、佛號ひね
と修するとは、後生が氣にかゝるので彌陀にもたれて、專
ら念佛を稱ふるあり、現世をいのであるとは金まふけが仕度ひ、
長生が仕度ひので、神様にそがりて今生を祈るなり、之を
現當并修の雑修と名け、又は部類の雑修とも云、ケ様か人
を千人よせても、一人も往生する人は無ひと云事を、千中
無一とさらはる、どの玉へり、茲に鳥と獸とが軍を仕た時
の話しがあります、鳥と獸とが軍をそるに、蝙蝠が之と見
て鳥が勝ちそふなど、鳥の身方をなし、獸が勝ちそふなど
、獸の身方をなし、彼方へ引付き此方へ引付き、二心を抱
ひて軍の旗色計り見て居りましたが、遂に兩軍とも戦ひ勞

れて和睦し、軍が止みました、所で彼蝙蝠ちや、鳥の仲間
へ入らんとすれば鳥から嫌はれ、獸の仲間へ入らんとそれ
は、獸から嫌はられ、終に何れの仲間にも入れられず、利
へ向後は晝の間には、出回る事は成らんと禁じられ、漸く
日の暮から夜の間に、出回る事がならぬ様にしられたと云
話しがあります、今此現當并修の雑修の人達は此蝙蝠であ
りまぞ、何せと云へば此世と未來の旗色計りを見て、後生
が氣にかゝり出そと、一心になりて念佛を稱へ、此世の幸
福が得度なると、一心になりて神様を信仰する、斯る二心
で居りまそと、蝙蝠が鳥と獸の仲間入りが出来なだと同
く今生の幸福をも得ず、後生の大事も損じ、今生後生二世
共に誤り、又もや三途の火坑へ飯る事うたがひあし、依て

千中無一と御嫌ひ成さる、なり、川岸に舟のありけるに、片足は岸をふみ、片足は船をふむに、にはかに舟と岸とが分れたらんには、岸へも上ら幸願にも乗らせ、水中へ溺る、事必定なるが如し……又瀛車と蒸瀛船のあるを聞き、早く行く爲には瀛車に乗らん、臥て居て行く爲には蒸瀛船に乗らん、左すれば早ふもあり臥ても居られると……是れども、實際にかけた時早きを望んで、瀛車に乗れば船には乗られせ、臥て居る爲に蒸瀛船に乗ば瀛車には乗れせ、若瀛車と蒸瀛と両方にながめて居たらんには、一も取らせ二もどらせ齋にも外れ非時にも外る……此世は神さん未來は佛様と、佛と神とを両方にながめ居たらんには、神の御

意にもかなはされば、現世の幸福をも得そ、佛の御意にかなはされば、未成年成佛の仕合せをも出來ず、是ぞ誠に現當二世の大不幸ものなり、努力二心を抱ひて神と佛に見離され玉ひぞ、

○理論と實際

我人には宗教心と云貴重なる心

がありまして、總て後生の事が氣にかゝりませ、然れども其氣にかゝる心はあり乍ら、勝手な勘定を致しまして、壯健な間には家業と勉強し、財産を殖し置ひて息子に嫁をとり、娘等は縁付かせ、内にも孫、外にも孫……家産も家事も息子や嫁に任して仕舞ひ、最早年も寄り日用の仕事を出來ん様になり、閑暇を身に成りたる時分に、寺参りを成し佛法を聴聞して、死んだら極樂参り、左すれば此世も安

樂未來も極樂、此様な仕合せものは無ひと……、乃て外
 から氣を付けて、命は老少不定ゆへ、そんな甘ひ譯には行
 きまそまひ、其内病氣でも發りたら、寺参りは出來ません
 予、依て今の内から御参りをなさひませと勸むれば、「イヤ
 く」若病氣でも仕たなら、醫者に見て貰ふて、兎ても至快
 は六ヶ敷と、云様を事に成りたら、其時手次の住持や、あ
 りがたひ同行に來て貰ふて聞けば、何も差支へなひ、「マア
 く、壯健で働かれる間は、精一杯働ひて置かねばならん
 ……、か則ち見出に掲げた、理論と實際と云話しなり、
 成程理論は尤もなれども、其積り通りに實際に行はれるや
 ら、行なはれんやら覺束なき次第なり、否決して左様は参
 りまそまひ、平生より心掛けを厚ふして、常に聽聞してさ

へ落付き兼ねる後生の大事を、臨終まで延して置ひて、「サ
 ア」と云時分に一返聞ひて極樂参りせふとは、横着千万なる
 理論なり、危ひく、茲に鼠の會同と云話しがありまそ、
 澤山も鼠が集りまして、何と彼猫に捕られぬ様にするは、
 如何かしたならよろしひと、議長長鼠が議題を掲げますと、
 一正の小鼠が進み出て發言しまそ様は、逃げる事と稽古し
 て「サア」と云たら、一目散に走るがよろしひ、依て平生に猫
 に走り敗けん様に、走る事を覺へて置くが好ひと思ひまそ
 ……然るに又一正の老練鼠が進み出て、「イヤく」平生か
 ら走る稽古もよけれども、何ほど我くが走る事と學んで
 る、猫より早く走るほどの足は持たぬ、又假ひ其稽古が出
 来て、猫より早ふ走る様に成りたりとも、猫の方からサア

今櫻むぞ早く逃げよと云鹽梅で、「ニヤ」と報知をして呉れ
 るとよけれども、我々を櫻みに来る時は、「ニヤ」とも云は
 せ、殊にさし足に成りて来るゆへ、決して逃げる間が無ひ
 と、動議を發しかけると、又一正の青年鼠が進み出て、夫
 に付て僕は一案を編出したなり、何はと猫がさし足に成て來
 ても、直に來たと云事が知れる工夫がある、夫はとふも
 かと云に、猫の首に鈴を着けて置くが一番なり、左それば
 猫が動くと同時に、鈴も動くゆへ必ず、「チリン」と云音
 がそる、其音が聞こへるあり、「ソリヤ」來居ると心得、急ぎ
 走れば難なく猫には櫻まれせして、無事に其場は遁がれる
 であらふと云と、一同総起立の同感賛成、「チユー」と否「ヒ
 ヤ」と可決して、今は早や其議場を退かんとするに臨ん

て、職長鼠の云く只今の鈴の妙案は至極賛成なれども、さ
 て其鈴は誰が猫の首に着けに行きまそか、次手に人撰投票
 をそるがよかるふ……其時あまたの鼠は一人も否一正も
 、鈴を着けに行くものはなかりたど……此理論の如く實
 際は行はれざる証據なり、前に云如く臨終に御法話を聞ひ
 て、極樂泰りと云て居る人達は、猫の首に鈴を着くべしと
 論むたる、青年鼠の御仲間なり、嗚呼危ひ

○六字丸の傳來

抑此南無阿彌陀佛の六字丸は、

かたしげなくも久遠實成の昔より、阿彌陀如來の大醫王が
 今日我等が病体を御覽せられ、五劫思惟に御診察下され
 、永劫修行に四十八種の薬味を調合し、積功累徳の御製方
 、撰採撮取の御匙加減、機法一体に煉り堅め、終に仕上げ

の付ひた六字丸の由来をば、大聖世尊の大醫王が、三部經の醫書の中に、微細丁寧に御説き成されたを、印度と支那と日本と、此三國に手を分けて、龍樹天親曇鸞道綽善導源信源空と、七代の院長が能く賣り弘め、第七代目の院長則ち源空上人より、撰擇本願念佛集と云へる添狀を認めて、吾本願寺の御先祖の副院長見眞大師へ御相傳あそばされてより、如信上人覺如上人善如上人綽如上人巧如上人存如上人の御代々、一子相傳の良薬と定り、八代目の中興上人に至りては、八十通の御文と云能書を調へ玉ひ、眞宗再興の看板をかけ、日本全國にはいかりなく、專賣特許の御弘めとなり、最早者婆扁鵲の両院長も、決して似薬の製せられぬ六字丸なれば、無始より已來病み疲けたる今日の我等、三

世諸佛の御治療も盡き、十方諸地の御配齋も叶はぬ、貪欲瞋恚愚痴三毒の三病を發し、從苦入苦從眞入眞と、段々病ひは根深くなり、無有出離之縁と九死一生の大病人が、自力疑心の毒斷をして、たそけたまへと只一粒、吞み込む一念の立ち所に、起死回生と至快し、今まで炎王の因果帳に、記込まれたるそのものが、打て變りて正定不退、追付け無量壽の長命を、保つに疑ひなきは六字丸を服用したる、芽出度信者の身の上である、

○香と鼻と和す

芝蘭の室に入れば、久ふして

其香を忘る之と化すればなり……此は香を焼く一間の中に入れば、初めは香が薫へども、後には香が鼻に入らぬ様になる、彼の香が鼻に入る間は、香と鼻とが離れてある、

ゆへ、能く其香が鼻に這入れども、後には其香が鼻の物に
 成りて、嗅ぐへき鼻と向ふの香とが、一つに成りて仕舞ふ
 ゆへ、其間に久敷居れば居るほど、香は自分の鼻へ這入ら
 ぬ様になる、其坐敷を立ち出で、人に觸れば、さても足下
 は好ひ香ひが仕まると云………今も夫が如く他力信心決定
 の人は、彌陀のたのむ一念より、攝取光明の一間に入り、明
 け暮れ大悲の香ひに染めば、悪人の悪臭が除ひて、身も心
 も南無阿彌陀佛にまろめられて、轉悪成善の香ひが仕出し
 まそ、彼阿仙薬と云薬は素は土なれども、香ひの好ひ薬と
 成りたは、辟香と取りて埋めたる傍の土に、自然と其辟香
 の匂ひがうつりて、刺へ病を愈そ様な薬と成る如く、斯る
 悪人女人の泥凡夫の、煩惱成就の胸の中へ、大悲の辟香と

埋め玉へば、今はいつしか其匂ひがうつり、信心歡喜の喜
 ひとなれば、土より劣りた凡夫の身が、立派に極樂参りが
 出来まそる、彌陀のむ身と成るまでは、身も悪あり口も
 悪なり意も悪あり、三業共に悪で堅めた我等なれども、信
 心決定の後には口も善、身も善、意も善、三業共に皆善と成
 りまそ、是皆他力の御引回しにて、稱念せれども更に自
 の行に非せ、如来の行を行するなりとありて、我人が口に
 南無阿彌陀佛と稱るが、取りも直させ阿彌陀如来の口業功
 徳あり、我人が身に禮拜恭敬の御敬ひを尽そは、取りも直
 させ阿彌陀如来の身業功德なり、我人が憶念の心常にして
 御恩を相續するは、取りも直させ阿彌陀如来の意業功德な
 り、如来三業の功德が、我人にうつらせらる、から、香ひ

と鼻どが和そるが如く、稱ふれば直に聞こみめし、禮それ
ば直に見そなはし、念それば直に知るしめそなり、妄語や
悪口の出居りたる口から、常に南無阿彌陀佛があらはれ
、殺生や邪淫をあしたる姿にも御敵ひの舉動が備はり、貪
欲瞋恚の胸の中にも、御恩煩しやありがたやと、憶念相續
の出来るは、皆是大悲の御用きであります、

○己れを忘る

至心信業已れを忘れて、無行不成

の願海に歸せよとありまそは、彌陀の御まことに眼が着ひ
て、御誠一つが大丈夫く思はれて、我身の手許の雜行や
ら雜修やら自力の言ひを熾張打ち忘れたを云なり、人の我
に徳あるや忘るべからせ、我の人に徳あるや忘れんばあ
るべからせと……人の恩を受けた事は忘れぬ様にせよ、

人に恩をさせた事は速ふ忘れて仕舞と教へたのである、大
方の人が顛倒で人の世話に成りた恩は、當分丈けは御庇で
くと忘れせに居れども、月日が立てば其恩は忘れて仕舞
、又人に恩をさせた事は、些少の事でも覺へて居りて、ア
しした世話もした、こしした世話もしたと、何時までも忘
れぬ、夫ゆへ人に受ける事は飽き足らぬども、報そ事は嫌
ひなり、恩と受けた方からは、仕過るは恩がへしをした
と思ふて居るに、人に恩をさせた方からは、あれほどの大
恩をさせたに、恩知らせめが義理知らせめがと云て、不足
計り思ふて居る、夫ゆへ恩をさせた方には速う忘れるがよ
し、恩をきた方には一生恩を忘れぬが好しと教へたものな
り、併し忘れよふと思ふ事は忘れられぬもの、忘れてはな

らぬと思ふ事は得て忘れ易ひもの、是が総ての人情ぢや、
 後生の一大事を彌陀に任せ兼ねたる、「コザカシ」已が根性
 は、十人が九人までは又してく立戻りくして、已れが
 忘れられぬ、ねてもさめても忘れなくとある廣大の御恩
 は、兎角忘れ易ひ、去り乍ら此度は是非に己が自力根性を
 忘れて、彌陀の至心信樂の御誠に眼を着けて、一心に彌陀
 たのむ身とならねばならぬ。

○闇投やみ磔

盲人が弓を引ひても、鉄鉈と放
 つても、中々的には中りません、夫が如く凡夫の小智を以
 て、佛の大圓鏡智に向ひ、地獄が無ひの極樂が虚妄のと打
 て見ても、中る事ではありません、ケ様な闇投飛磔する人
 を、邪見の外道と云、地獄も無し極樂もなし、火を喚き消

せば其火は空中に散じて、無くなりて仕舞ふ如く、此人聞
 が死する時は、魂は空間に散して無くありて仕舞ふものな
 りと(是は無の邪見也)又麥を時けば麥、菽と時けば菽、幾度
 時ひても菽が麥にもならず、麥が菽にもならず、幾度生れ
 ても、犬は犬あり人は人なり、犬が人にもならず人が犬に
 もならずと(是は有の邪見ケ様)に馬鹿な事を云て、濟まして
 居るものがある、凡夫は現在目に見へた事で無れば承知が
 出来ぬ、生る、までの過去と、死んでからの未來の事は、
 目に見へぬから色々の疑ひが起る、夫から地獄も無し極樂
 も無しと云、盲人の暗打が始まるのなり、病を未發に防く
 は妙手の能くする所と申して、大方の者が病氣が發りて、
 此が痛ひ彼が悪ひと云一段にならねは、常人はかどろかぬ

又名醫になると飯も善く食ひ酒も善く飲ひ間に、病を見
付けて治療を施す、三世の因果と云事は、凡夫の目には見
へぬ事ぢや、其所を知りて教へて下さる、が佛法と云もの
なり、彼網を引ひて魚をとるに、色見と云ものがありて、
小高ひ所へ上りて海の色を見て居るが、魚が一所へ集りた
其色を山から見分けて、「サア今魚が集りた早く網をおろせ
と其指圖となす、網引く者共の目には、魚の集りたは見へ
ぬ色も、色見の指圖に随ふて、網をおろしますと、必き魚
がとれます、今も夫と同じ事で、釋迦如來は三世了達の惠
智の眼を以て、覺りの山の頂から、迷ひの衆生を見おろ
して、「サア阿彌陀如來をたのため、必き極樂へ参られるぞと
御教へ下さる、を、凡夫は極樂があるやら地獄があるやら

知らぬとも、佛の仰せに随ふて、御意の如くに彌陀をたの
ひ身となれば、決定往生疑ひはありません、夫ゆへ大徳の
智者聖人方も、皆如來の教勅を信じ、彌陀の淨土を願はせ
られたものなり、一人の目あさが仰山な盲人を手引する如
く、目の見へぬものは、右へ往て好ひやら左へ去て好ひや
ら、一寸先は、暗なれども、目あさの案内者に従ふて行け
ば、別條は無き事なり、愚痴無智の凡夫盲人同様の我人に
は、大聖世尊の目の明ひた、佛の教に随ふて、自力と捨て
、他力とたのみ、御助け候らへど彌陀を信じ、南無阿彌陀
佛くと相續すれば、我れ知らぬ未來惡趣をのがれて、淨
土の往生を遂る事である、努力々々闍投飛磔する事勿れ
○一念大利
一念大利とは彌陀をたのみ一念に、

大きなまふけをとると云事にして、是を經には一念大利則
 是具足無上功德と説き、御文には一念に彌陀をたのみたてま
 つる行者には、無上大利の功德と與へ玉ふ意を和讃に聖人
 の云く、五濁惡世の有情の、選擇本願信せれば、不可稱不
 可説不可思議の、功德は行者の身にみてりとの玉ふ、御一
 代聞書には人の辛勞もせで徳をとる上品は、彌陀をたのん
 て淨土に生るにそきたるはなしとの玉ふ、我々は少しも苦
 勞をせせ、たのむ計りて功德の大まふけをして、極樂参り
 すると云は、一攫万金よりもまだく甘ひ仕合せなり、併
 し世間の教へに君子は義に喻り、小人は利に喻ると云事が
 ありて、今日尋常の人間は、只其まふけの多ひ事を喜ひ、
 貨殖の筋になると中々かしてひものにして、微細に氣が付ひ

てぬかるものではない、夫ゆへ鹿追ふ獵師は山を見せと云
 て、欲に眼が瞑んで爲間敷事までなして、遂に政府の厄介
 にあるものさへありませ、此等は皆小人愚俗の身の上の事
 なり、又君子と云て道を守る人に成りませと、得るを見て
 は義と思ふと申して、大きなまふけ事が出来ると、能く前
 後に氣と配り、此利けは甘ひ事ではあるが、是が我爲には
 成りて、人の難義には成りはせんか、他の權利を妨害する
 様事になりはせんか、道に外れた大利けでは無ひかと、
 篤と勘辨をきして、若道ならぬ事でありたらんには、濡手
 で粟のつかみどりする様な事がありても、左様な事には手
 を出しません、爰が君子と小人との分れ際でありませ、然
 るに今彌陀たのむ一念に無上大利の功德を、手も無く我

にそるは、一攫万金の謔に似て小人の所作にはあらずやと云に、物は一概には云はれぬものにして、易には天の祐る所る吉にして利あらずと云事なしとありて、他の物をからおどそ様にして儲けたは、永ふ身には付かぬが、天から下されたのはいつまでも身につく、駱巨が堀出したる釜に、官も奪ふこと能はせ、人も取ること能はせ、孝子駱巨に與ふと彫り付けてありた様なは、天の御興へなれば、少しも危氣は無ひ、今も之が如く彌陀たのむ一念に、第一義天の阿彌陀如來の佛意に契ひ奉るゆへ、南無阿彌陀佛の御實とば、惜氣も無く至て御回向下さるゆへ、此御實計りは焼けても失せもせせ、重寶は南無阿彌陀佛なりと、中興上人の御喜びの如く、此身は焼けば灰となれども、南無阿彌陀佛

の御實は灰にもあらず、未來淨土に往生して、無量壽の妙果を究める資本と成るが、一念大利無上功德なり、左れば早第一義天の彌陀の佛智に契ふ身と成り、一念大利の賜を頂き玉へ、

○此体え誰の物か

此我体は誰の物かと云へば

地水火風と云四人の檀那の物なり、其四人の檀那の物を、魂神と云たましひが、暫く借用したるものなり、曇鸞大師の玉はく、凡夫人天の果報は若は因若は果皆是顛倒なり、皆是虚偽なりと……我も人も有漏煩惱の雜業、顛倒虚偽のうそいつわりの業から、生れ來た此色身ゆへ、貧富貴賤のへだてなく、貴顯紳士の人達も、乞食非人の薦かぶりも、色身は皆四大和合の借りものなり、

よしもなき地水火風と假りあつめ
 我と思ふどはかなかりける
 尊さる賤さる此世へ生れ來れば、是非に一度は假りたる躰
 を、四大の檀那へ返濟せねば成らぬ
 まふ死ぬるこれは生れた報ひかな
 生きて居る中は休も動き、手足も動けども、一万三千五百
 息の出入の息は法界の風なり、身の軟氣は法界の火なり、
 総ての肉は法界の土なり、涙をこぼし汗を流し、惡露不淨
 の露霏は、皆法界の水の極微なり、此法界の四大を集めて
 、假りの体とありてあるは、丁度借家住居して居る様なる
 ので、住んで居る間は我家の様に思へども、家主から家明
 けを云ひ付けられた時は、早速明けて渡さねば成らぬ、今

も夫が如く地水火風の四大假和合の、借家住居の我等が身
 あれば、活きて居る中は我れぢやくと思へども、無常の
 家主に追ひ立てらる、時は、只今でも明け渡さねば成らぬ
 身は何時の烟りのたねと登るらん
 人をかくりてかへる鳥邊野

今は誰夫が葬式ぢやとて、我もくと供をして、野邊の送
 りを仕舞ふて歸る道そがら、ふりかへりてあとを見れば、
 今其人は只一片の烟とのぼる、我が此躰は何時の烟のたね
 であらふ予と申したは、實にもつとも的事ぞかし

鳥邊山きのふも今日も立つけむり
 ながめて通るわれはいつまで
 人を送りま我身の上も、遂には人に送らる、は必定なり、

實にたのみ少ひは人間の分野ぞかし、道理こそわれ本が虚妄顛倒の、うそいつわりの業で生れた人間なれば、亦一生もろろいつわりで、果て、仕舞ふのでありませ、本具の家は今度死んで、最一つ向ふにあるのでありませ……

○煩惱の林に遊ぶ

正信偈の中に惱煩の林にあり

んで神通を現じ、生死の園に入りて應化を示すとありまして、此は極樂淨土の大菩薩方が、還相回向と娑婆へ出かけて、自由に衆生と御濟度成さる、事を讚嘆し玉ふなり、淨土の菩薩方が衆生を濟度成さる、は、獅子の鹿を捕るが如く、猫の鼠を捕るが如し、如何なる悪人凡夫でも、自由自在に御濟度が出来、其還相回向の成され方には色々ありまして、種々の身を示現せると云て、種々の形ちと成り

て、有情の塵に交り玉ひ、父とも母ともなり、妻ともなり夫ともなり、兄弟姉妹親戚朋友、又は牛ともなり馬ともなり、犬ともなり猫ともなり、鳥ともなり魚ともなり、種々方便の姿た形ちは、時により所により、相手の機を鑑み玉ひて、様々の形ちを示して、導き玉ふ事である、之を同事攝と申して、其物くと同じ事に成りて濟度し玉ふなり、一宗の祖師見真大師は即ち其御一人なり、假令へば泥の中に投りたるのを、拯ひ上げふとぞるには、我が体を汚そまいと身用心しては、思ふ様には働かれぬ、我が身も其泥の中へ飛び込んで、共に泥に汚れねば、投りたるのは救はれません、祖師聖人御一代の御化導が其通り、彼聖の御本地は阿彌陀如來、御垂迹を尋ねれば御年九歳の御出家に

て、二十九歳までは天台眞言等の、諸宗の奥義を究めさせ
 られたれども、末代の凡夫は是ではいかんと、二十九歳の
 三月に、聖道門の珠數と切りて、法然上人の御弟子と成ら
 せられ、御年三十の時までは、佛の禁戒を堅く守らせられ
 、清淨潔白の御出家にて、愛着煩惱の泥に汚れ玉はせ、然
 れども末代今日の凡夫、妻にまどはれ子にはだされて、三
 毒五欲の深ひく泥の中に入りて、浮び上る事のならぬ我
 等が爲めに、六角堂の觀音大士の御引導と、御師匠の法然
 様の御指圖と、月輪殿の御望みとによらせられて、御年三
 十一歳にして、玉日の宮と御配偶、在家止住の恩愛の泥の
 中へ思ひさりて飛び込ませられ、假令此身は愛欲の泥に
 よこれても、在家止住の悪人凡夫の手を引ひて、極樂淨土

へ還らふならば、笑はれても、大事なひ、謗られても構ひは
 せぬと、今日我等が仲間入を成されて下されたればこそ…
 …狂人西に走れば追ふもの亦西を、其走る事同じ、走る
 所以は異なりと……我子が狂人に成りて走り回れば、其
 親は連れ歸らふ爲に、方々を追て回る、之を側から見れば
 二人乍らが、乱心の様なれども、一人は氣が違ふて走る、
 一人は正氣で追ひ回る、其譯は大きに違ふて居る、今が夫
 と同宏事で我等如きの本性を取り失ふた、散亂鹿動の狂人
 共を連れて歸らふと、跡を慕ふて追ふて回らせられたが、
 「トッ」此度は追ひ詰められて、三惡道へ逃げ行くものと
 、否應云はさ是非共極樂へ、連れて還らせらる、が、祖
 師聖人御一代の御化導にてある、此が煩惱の林に遊び玉ひ

たる、還相回向の御恩徳でありませ、

○力の最上

世に力の強ひものも種々あれども、

彌陀の力は強ひ力はありません、何せと云へば十悪五逆、
謗法闍提の輩まで、回心と心をひるがへらせ、懺悔と前非
を悔ひさせて、轉悪成善の大利益を施し、悪人を轉じて正
定聚の分人ときりかへ、斯る力は議るべからざるがゆへに
、不思議の佛智とも云ひ、不可思議の願力とも云ふ、つら
く、惟みれば年の始めの元朝から、年の終りの大三十日ま
で、今日ぞ一日菩提の爲とて、家業を止めて人跡絶へたる
谷間に身をひそめ、人里遠き洞にかくれて、坐禪觀念をこ
らしたる例しもなし、惜ひとか貪ひとか云て餓鬼道の因を
蒔き、惜ひとかねたましひとか云ては地獄の業と捕へ、目

に見ては執着を起し、身に觸れては愛欲と催し、舌に味ひ
耳に聞き鼻に臭ぎ心に思ふ事、皆悉く迷ひの業計りを造り
貯へ、姿は立派を人なれども、心は羅刹夜叉の如く、額に
角は見へされども、胸には鬼より強ひものが居る、背には
鱗は無れども、心には大蛇よりも怖しき根性を懐けり、死
なば一定三塗は我家、假令ひ天地は覆へるとも、此身が佛
に成ると云事は無き事なるに、茲に有がたひは彌陀の本願
、斯る悪人凡夫の我等も、助け玉へと一念たのむ其儘に、
不退轉位に引直し、光明の懷に抱き込まれ、攝取の蒲團に
大悲の手枕、弘誓の衣服あた、かに、心光攝護の益に預り
、何時露の命は消るとも、絶息閉眼の其時は、法の力に西
へこそゆけ、世話も造作も少しもなしに、極樂淨土の往生

を、送げたてまつるに間違ひの無ひは、信心決定の行者なり、斯る悪人が斯る仕合せを得るは、更に行者の力にあらそ、信樂を獲得せる事は如来選擇の願心より發起するとあれば、是が即ち不可思議の願力あり、佛力の不思議なり、世の中に地震ほど強ひ力のもはありませぬ、昨年十月廿八日の朝は、少時間中に美濃と尾張の兩國を顛覆しました會我の五郎や朝日奈杯には八十五人力、辨慶は千人力、金平には敵一倍、楚の項羽には八万人力とか、世には力の強さものも多けれども、山一つも動かそ事は出来ませぬ、然るに地震は何程の力を持ちて居ることなるが、廣き世界を一時に動かそ、實に不可思議の力なり、今日の我人は無始より已來、十惡五逆に煉り堅めたる煩惱の大地、普賢菩薩の

十人力でも、藥師如来の十二人力でも、釋迦の五百人力でも震然ともせせ、引けども持れども素不知良、諸佛菩薩の腕頭で動かそ事の成らぬ煩惱なれども、阿彌陀如来には何ほどの力がある事にや、如何なるものも宿善の地震に動かされ、胸の大地は信心開發と引裂けて、南無阿彌陀佛くと、日々夜々、行烟の吹き出る様にありたるは、偏に大願業力の不思議であれば、不可思議尊を歸命せよ……

○世にたのむべきものなし

往事渺茫として都

て夢に似たり、舊游零落して半ば泉に歸そと……月日の駒の足早くして、年月の積る事は實に夢の間なり、去年の暮までも、今年の春までも参詣聽聞に肩を并へて、参り下向に手を携へたる人達も、今は本都婆の主となり、伴ふも

のは塚の印の松ひとさ………人は往ひて我は殘る、是有り
 どやせん有らざるとやせん、体は去りて名は留まる、彼は
 夢か夢にあらざるかと、解脱上人の嘆きなるが………昨
 日見し人はと問へば今日はなし我身も明日は人に問れん、
 思へばく頼み少き世の中にて、人間は不定の境と聞く時
 は富貴の人も貧賤の者も共に是浮へる雲、目に戯れ色に深
 みはなやかなる身の上も、衰へぬれば朝顔の日影待間の分
 野なり、春は花の色を見て世間の生滅と知り、秋は風の音を
 聞きて吾身の無常を觀せよとは、大論の御氣付けなるが、
 實に心ある人々は花に寄せ目に準へて、無常の理りを悟り
 玉ふ、假令玉の冠を戴き玉ふ万乘の君も、金モールの軍服
 を纏る、百官の臣も、遅れがたきは無常あり、金銀珠玉事

欠ぬ長者達は、彼所に亭を建て此所に樓を構へ、暖まる春
 の日は庭の櫻に對して、海棠の匂ひと斯を争ひ、冷やなる
 秋の夜は臺の月を友として、銀河の澄めるに胸を洗ふ、冬
 の日も寒を知らせ、夏の夜も暑を覺へせ、食は山に網し川
 に釣らせて毎に味を替へ、何一つも乏しからざる人達も
 別離の苦みを免る事叶はざれば、子は親に後れて悲しみ、
 親は子を先立て、嘆き、妻の夫を失ふて暮ふもあり、夫の
 妻に分れて愁ふるもあり、杖とたのみし孫を死なせて腸を
 斷つ翁もあり、柱と思ひし總領に離れて血に泣く毒もあり
 嗚呼儘ならぬ娑婆の分野、頼み少き浮世の習ひ、世にたの
 むべきものなし………浄土に非せば心に契ふ友なし、極樂
 に非せば心に契ふところなし、急ぎ浄土の往生をねがひた

まへよ、

○御勤めほど念佛せよ

真宗有縁の御同行中に

は、朝夕二度の勤行に正信偈念佛和讃と、丁章に勤める人も多き事なるが、又正信偈も知らせ念佛和讃も、覺へ居らざる人も亦多き事なり、之を知る人は之と勤めて佛恩を報謝し、之を知らざるものは只稱名念佛を申して佛恩を報謝せり、何れも佛恩に向ふて報謝の誓みと盡そつとめなれば正信偈の勤行が勝る、にもあらず、稱名念佛のつとめが劣るにもあらず、是皆廣大なる佛恩を念報する、信後相續の行業なるのみ、然るに正信偈并に念佛和讃の勤行をなすには、少くとも二十分の時間を費やさねば、勤め終る事は成りません、只御念佛丈する人は五分か八分の時間を費やそ

のみなり、世間の仕事をその勘定つくから云て見ると、正信偈念佛和讃の勤行とするも、只念佛丈するも報恩の經營に於ては、優劣淺深なしとすれば、念佛丈して五分か八分の時間を費やそ方が、時間は費へせ勤めは仕易しと云道理なれども、是は決して左様な事には出来ぬ筈なり、何せと云へば御一代開書第十一章に、十月廿八日の速夜にの玉はく、正信偈和讃をよみて佛にも聖人にもまいらせんとおるふかあさましや乃至ことに七高僧の御ねんころなる御釋の意を、和讃にき、つくるやふにあそばされて、其恩をよくく存知して、あらたふとやと念佛するは、佛恩の御事を聖人の御前にて、よろこびまうそこ、ろかりと、くれぐれ仰られ候ひさど、此意に依れば一百二十句の正信偈や、三

百余年の御和讃の中には、七高僧の御ねんごるなる御教化の御意が、分り易く御述さされてあれば、其御恩のほどをよく味ひつゝ、あらたふとやかたじけなやと、佛恩師恩の事を聖人の御前にて、喜び申す事であるとの御知せなれば、御流れを汲む御同行達は成べく、正信偈念佛和讃の勤行せねばならぬ等なれども、いかんせん文字を知らねば、之を覺へる事もかきはせ、止むを得ず念佛丈をなえて朝夕勤行をなす代りとなす次第なり左れば念佛丈をなす人達は、五分や八分の時間でなく、正信偈念佛和讃の勤行をなしをはる時間ほどは、必き佛祖前と退かして、正信偈の代りと思ふては、正信偈よも間は念佛を申し、六首引の代りと思ふては、六首引をなす間ほど和名をなし、是

まては正信偈や和讃を知らぬを耻どもせせ。却りて御禮が早く済むのを、勝手の様に思ひ居られたる人々は、向後一番心を改めて、責ては正信偈念佛和讃を勤める代りと思ひて、正信偈念佛和讃を勤めるほどの時間を費やし、ゆるりと念佛を申して、勤行する人にまけぬ様に御報謝のいとなみはけみ玉へよ。

○相續の本行は何か

信後相續の行業はいろく

あれども、其本行は何かと云に、南無阿彌陀佛の念佛なり、讀經するも視察するも、禮拜するも供養するも、皆信後の行業なれども、是等は皆南無阿彌陀佛の念佛に従ひたる付屬物なり、其大將たる相續行は念佛の一行なり、已に第十八願には、先至心信樂欲生の三信の佛因を誓ひ、其次に

此信心を相續するには、南無阿彌陀佛の念佛すと、十念の
 行を誓ひ玉ふて、更に讀誦觀察等の付屬物の事は誓ふては
 ありませぬ、由て本願を信して報謝の行をいとなむには、
 今日我等凡夫のみにあらず、大心海化現の善導大師も、
 大勢至菩薩の御化身たる法然上人も、皆南無阿彌陀佛の念
 佛を以て佛恩を念報し玉ふ、此佛恩を念報するには、稱名
 に上越を相續行は無きあり、左れば務めて稱名念佛を怠ら
 ぬ様、ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛を稱ふべ
 きなり、中興上人八十通の御教化にも、御報謝はいつでも
 稱名念佛で教へ玉ふ、そもく五帖の消息中、第一章には
 うれしさをむかしは袖につ、みけりこよひは身にもあま
 りぬるかなど云古歌を御引きなされて、自力念佛と他力稱名

とを水際分けて明かに御教化下され、正雜の分別を開き分
 け、一向一心になりて信心決定の上に佛恩報盡の爲に念佛
 申そこ、ろは大きに各別なりとの玉ひ、夫より第五帖目の
 一番仕舞の廿二通目には、されば南無阿彌陀佛と稱ふるこ
 ろはいかんだなれば、阿彌陀如來の御たそけありつるあ
 りがたさよと思ひて、夫を喜び申そこ、ろなりとの玉へり
 、左それば信心相續の行業はいろくあれども、南無阿彌
 陀佛の稱名が、相續行の最上なる事を知らしめんが爲に、
 第一帖の第一章より、第五帖の結章まで、念佛一つで御勸
 め下されたが、中興上人の御教化ふりなり、此意を得させ
 られて、御一代聞書三百余章もある中に、第一章には勸修
 寺村の道徳を御相手に、元朝早々から念佛の自力他力の水

際分けて、御教化成された御謂れを載せさせられて、自力の念佛と云は念佛多く申して佛けにまいらせ、此申したる功德にて佛の助け玉はんせる様に思ふて稱ふるあり、他たと云は彌陀をたのみ一念のれこる時、やがて御助けにあづかるなり、其後念佛申とは御助けありたるありがたさくと思ふ心を喜びて、南無阿彌陀佛くと思し計りなり……されば八十通の御文の始まりも、三百余章の御一代聞書の始りも寸分かはらぬ自力他力の念佛の御教化にして、信心相續の仕事は此他力念佛と稱ふるはと、結構な行は無きゆへに、佛恩のほとを喜ぶには、いつも御念佛するより外は無ひぞとの思召なれば、余の行を本とせせして、念佛の本行を修したひ事でありまほ、

○活き如來と思われまほ

岸上より招喚し玉ふと云へども、釋迦佛の開悟に非せしては、争か彌陀の名願を聞く事を得ん、吉水の流れさよく、大谷の水深しと云へども、木像ものいはざれば法門を説く事なし、經典口なければ佛教をのべせ、これによりて佛法弘通の師範を以て、滅後の如來と仰ぐべしと、存覺上人はの玉へり、宣なるかな釋迦彌陀は慈悲の父母と比の玉へども、親く御化導を蒙る事は出来ません、其慈悲の父母と喻へたる、釋迦彌陀二尊の両親に代らせられて、未代今日の無明煩惱の大病人に、本願醍醐の法薬を以て、厚く療養を施し下さる、は、當時有縁の大善知識なり、是を滅後の如來とあがめよと比の玉へり、昔さんどふでありまほが、有

夫れ彌陀如來は西

縁の大善知識をば〇〇〇〇の御子なり〇〇〇〇の御兄
弟なりどながめ、滅後の如來とも思はれせ、生如來とも思
はれん様な事ならば、兎ても御取次下さる彌陀の本願は信
せられまそまひ、大善知識をば生如來なり、滅後の如來な
りどあがむるほどの宗教心があればこそ、師教の儘が信せ
らるゝなり、師教が信せらるれば、迷ひを轉じて悟りに至
るゆへ、師の教と持つは取りも直さき、釋迦彌陀二尊の仰
せに願ひ召に契ふ由れにして、佛教を信じたるものなり、
依て師の恩を報せるは、即ち佛恩を報せる由れがありまそ
、只世間の今生一世の道を教ふる師には非き、今生後生二
世かけての道を教へ下さる、大善知識の御恩なれば、此御
恩は佛恩と肩を并べた御大恩あり、之に由りて御和讃には

如來大悲の恩徳は身を粉にして報せし(佛恩)師主知識の
恩徳もほねをくださても謝さべし(師恩)と……斯る謂れの
ある師恩ゆへ、吾が有縁の大善知識には、君と父と師との
三徳を備へ玉へり、何せと云へば一万余ヶ寺の末寺僧侶に
して何ほどの、學問と徳望がありまして、其學徳を以て
法主の位に登る事は出来ません、大善知識の師坐は阿彌陀
如來の御化身たる祖師聖人の御血脉、御相承の彼聖に限る
、由て末寺の僧侶并に有縁の信徒は皆是法臣なり、大善知
識御一人は此法臣の爲の君主なり、又有縁の僧侶信徒は子
なり、大善知識は親なり、慈悲の父母たる釋迦彌陀二尊に
代らせらるゝ御職掌なればあり、又有縁の僧侶信徒は弟子
なり、大善知識は師匠なり、今生後生二世安樂の道を教へ

玉へばなり、然れば即ち大善知識は君なり、大善知識は父なり、大善知識は師なり、我等僧侶信徒は此君父師に對する、臣なり子あり弟子なり、大善知識を視る事滅後の如來

願ひなき知識の教へなかりせば

いかでまいらん彌陀の淨土へ

赤尾の道宗と云人は、近江の湖水を一人して埋めよと仰せられても、善知識の御意あれば、畏りたりと御受けを申しませふと云はれました(御一代開書)夫れほどに大善知識を御崇敬申す心にこそ、教への儘が全で信せられることなり、皆さんも大善知識を視ること、滅後の如來の如くせられて、教へのまゝ、を信じたまへよ、

○如來の十恩

一に發心普被の恩とは、昔し大

善提心を發し、諸の勝れたる善根を修行し、諸の功德を成就し玉ふは、皆是法界の衆生に被らしめて、利益安樂ならしめ玉ふものなり、是を發心普被の恩と云○二に難行苦行の恩とは、如來昔し因位に於て、或は刀を以て身を刻きて千數を作し、其一、の身に悉く油を注ぎ、之に火をつけて千の灯どなし、一偈を聞かんとを求め玉ふに婆羅門爲に偈を説て云く、常者皆盡、高者皆墮、合會有離生者有死、と……此偈の意は常なるものは皆つぎ、高きものは皆をち、なり合ふたるものは皆はなれ、生る、ものは皆死ととなり、是丈の事を聞くにさへ身命をなけうち惜み玉はせとなり、或は山に入り虎の飢へるを見玉ひ、身を虎の前は投

ち、身を與へて之を救ひ玉ひ、或は雲山に於て修行し玉ふ
 とき、羅刹あり前半偈を説て云く、諸行無常是生滅法と、
 如來之を聞き玉ひ、後半偈と聞かんことを求め玉ふに、羅
 刹云く我飢へたり汝が肉血と我に與へば説き聞かさんと、
 如來そなはち我肉を刻きて之に與へ玉ふに、羅刹後の半偈
 を説て云く、生滅々已寂滅爲樂と、斯くの如きの難行苦行
 は、皆是衆生利益の爲なり、是を難行苦行の思と云〇三に
 一向爲他の思とは、如來永劫に諸の功德とつとめ玉ふは、
 純ら一切衆生と濟度せんが爲にして、更に已れが爲にした
 まはざるあり、是を一向爲他の思と云、〇四に垂形六道の
 思とは、如來形ちを人間と天上と修羅と地獄と畜生と餓鬼
 との六道に垂れて、諸苦の衆生を救ひ安樂を得せしむ、是

を垂形六道の思と云、〇五に隨逐衆生の思とは、如來諸の
 衆生の迷ひを離る、の心なき事を愍み、平等の大悲を運ん
 て、之に隨ひ之を逐ひ、苦を離れしめ樂を得せしめ玉ふ、
 是を隨逐衆生の思と云、〇六に大悲深重の思とは、如來衆
 生の惡を造ることを見玉ふては、身と割くが如くに思召し
 、安さ御こと、ろなし、衆生の三惡道に墮して種々の苦を
 受るを御覽じては、心に大きに憂ひ玉ひ惱み玉ひ、そなは
 ち大悲悲を發して之を救ひ玉ふ、若衆生の善を爲そを見玉
 ふ時は、大歡喜を生じ玉ふ是を大悲深重の思と云、〇七に
 隱勝彰劣の思とは、如來衆生の爲に微妙の相好無盡の勝徳
 を隠して、劣りたる身を彰はし玉ふ、法華經には珍御の服
 を脱きて、弊垢の衣を着し、除糞の器を執りて往ひて子の

所に到ると説き玉ふ、是等を隠勝彰劣の恩と云、〇八に隠
 實施權の恩とは、如來衆生の根機を觀し玉ひ、劣りたる機
 の爲には、大乘高尙の實教を隠して、暫く人天の權法を施
 し玉ひ、其機を調熟して後ち、大乘と説て之を救ひ玉ひ、
 之を隱實施權の恩と云、〇九に示滅令慕の恩とは、如來久
 しく世に住し玉はり、薄徳の人は善根を植ゆることを怠る
 ゆへ、滅度を示現して如來の出世に値ひがたき事を知らし
 め、心に懸慕を抱かしめ、勤めて善根を勵ましむ、是を示
 滅令慕の恩と云、〇十に悲念無盡の恩とは、如來は百年の
 定命を八十にして入滅し玉ひ、二十年の余福を留め、以て
 之を末法の弟子に與へ、又三藏の教法を留めて廣く之を修
 行せしめ、各々勝れたる果報を得せしめ、悲愍愛念利益無

究ならしめ玉ふ、之を悲念無究の恩と云、已上の十恩は裝
 璽出現の應身佛、則ち釋迦牟尼佛の恩徳なり、其恩徳を
 尙斯くの如し、況や西方淨土の教主彌陀法王の恩に於てを
 や、曠に云く如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報そべし
 ……………報せせんばあるべからず謝せせんばあるべからず
 ○一番易ひ仕事か二つ
 一番六ヶ敷仕事は自分の

力からで佛けになる聖道の修行にして、權大乘の法門では十
 信十位十行十回向十地等覺妙覺と、五十二の段級を三僧祇
 百大劫の永ひ間辛抱して、一級々々及第して遙かに後に妙
 覺果滿の佛にはなるのなり、一番易ひ仕事は彌陀をたのん
 で淨土に生る、他力淨土門の安心なり、願も入らば行も入
 らば、生得の機の盡にて後生の大事は彌陀に任せ、一生涯

は光明の中は起臥する計りなり(是二)又其一生涯廣大なる佛
 恩を報せざるには、身命を投ちても足らぬ、身代を傾けても
 尙餘る事なきに、身命や身代を捨るにも及ばぬ、彌陀たの
 む一念の立所に、南無阿彌陀佛の主となり、其主となりた
 る南無阿彌陀佛をば、行住坐臥歩み乍ら止まり乍ら、坐り
 乍ら足ふみのばして臥し乍ら、口に任せて只稱へ喜ぶ計り
 なり(是二)法然上人の御言葉に、世間の營み聞え無ればこそ
 、念佛の行をば修そべけれ、其故は男女貴賤行住坐臥を悉
 らばせ、乃至臨終にも其便宜を得たる事念佛には如かきと
 云へり、余の行はまことに世間匆々の中にしては修一がた
 し、念佛の行に限りては在家出家をあらばそ、有智無智を
 云はせ稱念するに便りあり、世間の事にさへられて、念佛

往生を遂げざるべからぬ等どのたまへり、又くれくも煩
 惱のうとさあつさをもかへりみず、罪障の輕き重きをも沙
 汰せせ、口に南無阿彌陀佛と申して、聲につきて決定往生
 の思ひをなせどものため、此報謝相續の稱名計りは、何
 事も差支へたる事なし、官仕をなはち官員と成りたる人達
 は、役所に在り乍ら政務を扱ひ乍ら、南無阿彌陀佛と稱へ
 、農家は鋤鉞かたげた其ま、米すり麥からの其儘に、南
 無阿彌陀佛と稱へ、職人は大工仕乍ら手傳ひ仕乍ら、機織
 り乍ら衣服仕立て乍ら、南無阿彌陀佛と稱へ、商人は賣買
 し乍ら算筆し乍ら、南無阿彌陀佛と稱へ、如何なる世渡り
 の道にも、差支へのなきは一番易ひ他力本願易行至極の一
 大妙法門なり、眞宗有縁の信男信女深く我身の仕合せを喜

ひ玉へ、

○惡水の源を防ぎ

金氣水濁り水腐れ水臭き水

そべて惡水が出て來るは、水脈が惡ひゆへか又は溝の浚へが惡ひゆへか、又は外から惡ひ水か這入るのかに違ひはありませぬ、若水脈が惡くば堀りなほさねばならぬ、又溝の浚へが惡ひなら掃除を丁寧にせねばならぬ、又外から這入るのあら、其穴口をうめねばならぬ、今此我々が身と口との二ヶ所へ惡業が働き出るは、何れ身に始めたるに非せ、口に始めたるに非せ、其源は心一つにある事なれば、其源を能く改めねばならぬ、そも彌陀の法水と云はれた彌陀大悲の水が衆生の心源に流れ込み、其心源より身にあらはれては、禮拜恭敬の業となり、口に流れ出て、は念

佛誦經の業となる、然るに身にも口にも禮拜恭敬念佛誦經

の水は出て走して、殺生偷盜邪淫(身惡口兩舌妄語綺語(口)があとへくと湧き出るならば、是は彌陀の法水が未だ我心源に、流れ込まぬゆへと心得て、速かに彌陀大悲の法水に潤さる、が肝要なり、又身口の二業に惡事の水が流れ出るは、心の溝の掃除が惡ひからと氣が付いたら、中興上人の御教の如く、細々に信心の溝を浚へて、彌陀の法水を流そ様心がけねばなりません、又身口の二業に惡事の水の流れ出るは、外から惡ひものが這入るのであると氣が付いたら、惡ひ所へ身を寄せぬ様、惡ひ人を友達にせぬ様、惡ひ事を眼に見ぬ様、惡ひ事を耳に聞かぬ様、總て惡ひ事物を避ける様に、惡業の出づる縁を絶たねばならぬ、斯の如く未

だ彌陀の法水が我心に流れ込ませと思へば、早く彌陀の
 心身となり、溝の掃除が悪ひゆへと知れたら、御相續の溝
 浚へに氣を付け、外からさしこむゆへと氣が付いたら、惡
 友杯と遠ざけ惡に近かよらぬ様に防がねばならぬ、殊更過
 ちの多きは口なり、此過ちの多き源とある口を、深くつ、
 しまねばなりません、百戰百勝一忍に如かき、万言万當一
 黙に如かき、百度戰ふて百度勝ちたるより、一度こらへた
 方がよし、万返言ふた事が万返當りたより、一返黙りて居
 りた方がよしと……知れたらんには、深く其源とを防ぐ
 より外はなひ、

○まゝの翁
 昔し近江の國に乞食し歩く翁あり、何につけてもマシテくと云より、人智ましての翁と

は名けたり、飢たる時は餓鬼の苦しみを思ひやり、まして
 と云ひ、寒さに付ひては八寒の氷を思ひやり、ましてと云
 ひ、熱さに付ひては八熱の炎を思ひやり、ましてと云ひ、
 甘き味に逢へる時は天の甘露と思ひやり、ましてと云ひ、
 奇麗な色を見面白き聲を聞く時は、極樂淨土の莊嚴を思ひ
 浮べて、ましてと云、誠に殊勝なる思ひにてこそ、

○佛誠と親の異見と同じ事歟

釋迦如來は大無

量壽經の中に、五善を説て五惡を誡しめ玉ふ、五惡とは殺
 生と偷盜と邪淫と妄語と飲酒となり、五善とは此五つの惡
 をたしなむ方なり、徒らに物の命をとるな、人の物をかそ
 め盜むな、決して女ぐるひをとるな、無き事を拵へて虚言
 をつくな、大酒のんで過らそなどは、世間の親が子に向ふ

て申し開け、常に異見するところなり、佛亦此五惡をば委
く説ひて、我等を誡しめたまへり、

○胸に棘あり 路に荆棘あれば人能く惡む事を知

る、心に荆棘あれば人惡む事をしらすと、心學盡見と云
書物にあり、人の通る路に棘があれば、是は惡むものがあ
るとて、誰でもいやがれども、人の胸の中に棘よりをそ
しむ惡心、則ち不道德さはまりて、人は惡かれ我身は善か
れど云様な、言語同斷惡むべき心がありても、夫は人が何
んども思はぬはそまぬ道理なりと、古人が申し置いたのさ
り、凡そ人たるものは、天然の眞心に耻ることなき様……
と云へば、昔さんは
○嫁追ふ鬼は何處に居る 夫は四百年ほど昔し、越前の吉崎にて蓮如様
口を捕へて、

が御化導の時分、彼聖に御歸依を申し吉崎へ、毎夜く參
詣する嫁のありたるを憎嫉んで、鬼の面被た姑が、敷の中
から飛で出て嫁を追ふた鬼がある、定めて其事でありませ
ふと……否々今私が嫁追ふ鬼と云は、そんな遠方の古ひ
鬼では御さいません、何れの町にも何れの村にも澤山に居
る、姑と云は媼の事でありませ、此澤山に居る媼は如何な
る約束とどかはしらねども、初めの比には中々嫁と愛しま
して、善ひ嫁でありませ、氣はだもよし、親仕へもよし、
挨拶振りもよし、立ち前もよし、人交際もよし、系もよし
機もよし、縫針もよし、夫婦中もよしと云から、そろく
悪くなりかけて、家風に入らぬは、氣に入らぬは、朝妻が
そざるは、宵寐をそるは、何とそるは角をそるはと、そる

度毎に悉く、我氣に入らぬ事計り、坊主憎くけりや袈裟まで憎ひと、嫁の憎くなるのと同時に、可愛がりし息子まで憎くなり、到底此家にはおかれぬと腹はきめたが、表で晴れて貰ふた嫁ゆへ、歸れの出でゆけのど云ことは、云ひ度くても云はれぬゆへ、追ひ出そ工夫を案じ出し、鬼の面被て威しはせんが、大膽にも面は被せして、むき出し面で可愛や嫁は、狸の様に扱はれて、毎日く青松葉はたかねども、くそべてくツツシヤと仕通し、居られるならば居りて見よ、是で居るから本眞の辛抱、もまもけむとて居られぬならば、勝手次第にいつなりども、尻をかかげて出るがよひと、口には云はねと云よりは、まだくひと仕向けとなし、終に一人は追ひ出したが、一人で足らひで二人

まで二人で足らひで三人まで、幾人どなく貰ふては追ひ出し、貰ふ度毎に金費て、追ひ出そ度に全出して、嫁追ふ度に貧乏する、前後見せの鬼が居る、自分も嫁でありたる時は、此姑と云鬼にいちめられ、私しが姑と成りたる時は、貰ふた嫁をいちめぬ様、可愛がらねばならぬとは、豫て心得居りたるに、自分が姑と成りたる時は、最早其氣は忘れて仕舞ひ宿酒と難産に懲りたるものなし矢張り嫁追ふ鬼と變化るは、世界一般の習ひなるが、皆さんよ嫁追ふ様な鬼共が、念佛行者の中に居ては、否攝取の光明の中に住居をしては、彌陀の光中は修羅界と成りませ、彌陀大悲の光明の中で、嫁姑の二匹の鬼が、角ふり立て、角力とりては、嘸かし佛陀の御胸が痛むであるふ、とふぞ是計りは……

新撰
改良
活用
說教
畢

明治廿五年十二月五日印刷
明治廿五年十二月六日出版

定價拾二錢

兵庫縣播磨國揖西郡半田村
十四番屋敷

編輯者 佐々木量俊

京都市油小路通花屋町上ル
西若松町三十四番戶

發行者 松田甚左衛門

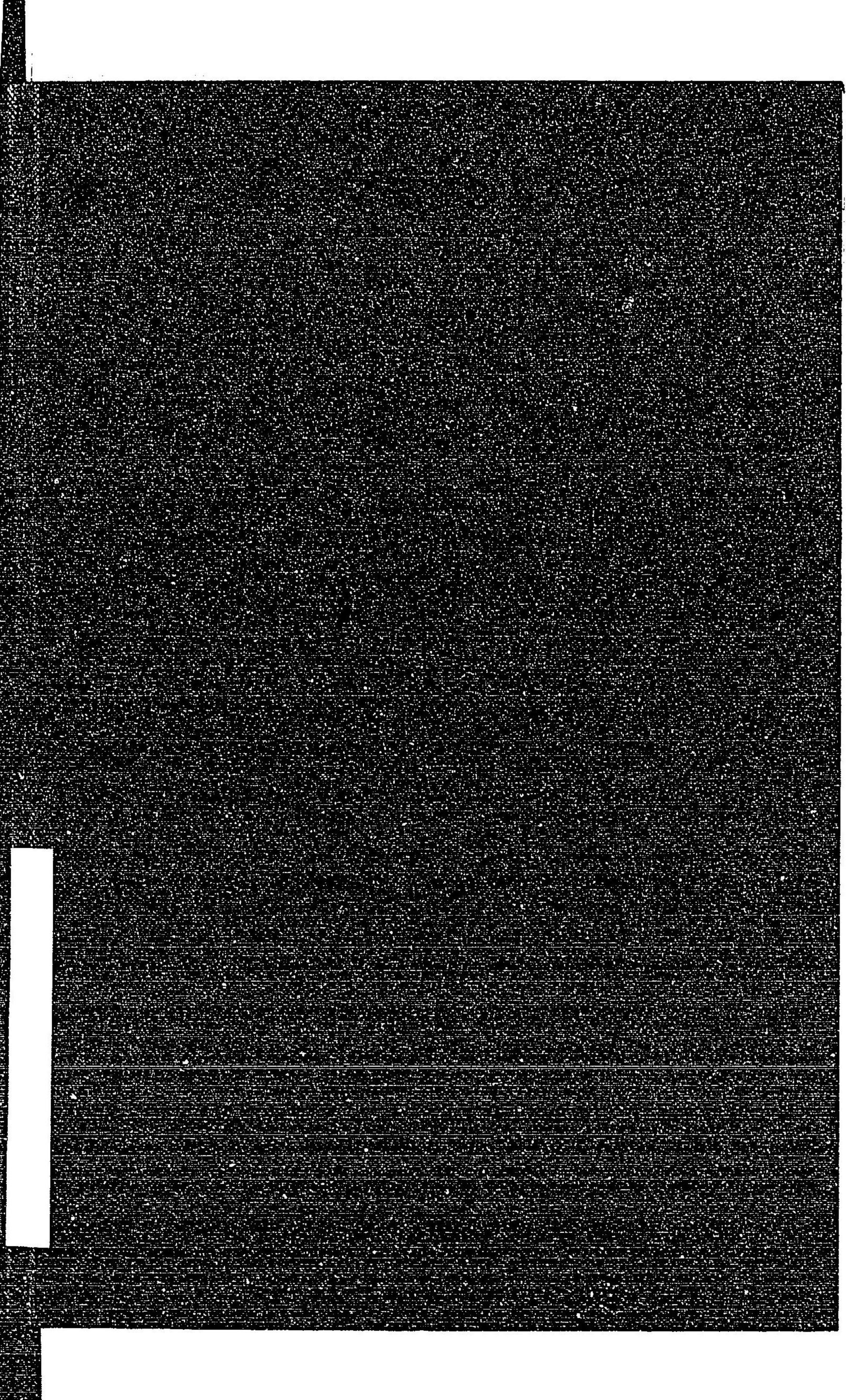
大阪市西區鞆下通二丁目
四十八番屋敷

印刷者 瀬戸清次郎



版權登錄





特18

720

新撰
改良 活用説教

・ 2

国立国会図書館